



	2025-58
監督:	ケリー・オサリヴァン、アレックス・トンプソン
脚本:	ケリー・オサリヴァン
出演:	キース・カプフェラー／キャサリン・マレン・カプフェラー／タラ・マレン／ドリー・デ・レオン／デクスター・ゾリコファー／H. B. ウォード／トミー・リベラ＝ヴェガ／アルマ・ワシントン／マシユー・C・イー／ハンナ・ドワーキン

👁️👁️ みどころ

『Ghostlight』とは演劇用語で、「閉館時や講演終了後の暗くなった劇場を照らす安全灯」のこと。それだけでは本作のストーリー展開はわからないが、『カーテンコールの灯』という邦題と『ロミオとジュリエット』の「劇中劇」という大筋を知れば、なるほど、なるほど。

もっとも、いくら演技がうまくても、オリビア・ハッセーのようなみずみずしさのないジュリエットも、腹の突き出た中年男のロミオも、私は金輪際、観たくない！そう思っていたが、後半からのアレヨアレヨの展開の中、遂にカーテンコールが・・・！

こんな映画の脚本を一体誰が？そして、誰が演出を？主演を？“ユニークで愛おしき珠玉のインディペンデント映画”を、タップリと楽しみたい。

■□■今年最高の作品！満足度 99%！それってホント？■□■

本作のチラシには、「今年最高の作品」、「満足度 99%」の見出しが躍っている。しかし、それってホント？まさか誇大宣伝では？他方、そんな見出しに並んで写っている中年男の写真の横には、「不器用な父がまさかのロミオ役！？」の文字が躍り、原題の『Ghostlight』が邦題では『カーテンコールの灯』だからこりゃ一体ナニ？

この邦題によると、本作ではひょっとして、この中年男が『ロミオとジュリエット』のロミオ役を演じているの？もしそうだとしたら、私はそんな映画は金輪際、観たくない・・・！そう思いながらチラシの裏側を読むと、「ストーリー紹介」の後に次の文章がある。すなわち、

演劇を愛するすべての人に。とりわけ、日本各地で、社会人劇団・地域劇団・市民劇団に関わっているすべての人へ。演劇に興味があるけれど、参加をためらっているす

すべての世代の人へ。歴史に残る、演劇と家族を描いた映画です。

こりゃ一体何の映画？基本的に私はこんな映画に興味はないが、「堪えきれないほどの涙」、「感動的で、美しく、忘れられない作品」、「絆についての繊細な宝石」等の謳い文句につられて、つい劇場へ足を運ぶことに・・・。

■□■3人バラバラのダン一家に注目！不幸の原因は？■□■

邦題を『カーテンコールの灯（あかり）』とする本作は、中年男のダン（キース・カプフェラー）が建設工事の現場で働いているシークエンスから始まる。ダンの仕事現場の前の路上で、車の運転手から罵声を浴びせられているから、ダンの仕事は大変だ。他方、家庭面でも、昨年身内に降りかかった“ある悲惨な出来事”に打ちのめされ、ずたずたに引き裂かれたダンには心の傷が今なお癒されていないらしい。感情を表に出せない不器用な性格も災いして、妻のシャロン（タラ・マレン）や情緒不安定な思春期の娘デージー（キャサリン・マレン・カプフェラー）ともすれ違いがちなダンは、前年の事件に関する訴訟を起こし、弁護士のもとに通い詰めていたから、さらに大変だ。

しかし、そんな本作導入部のストーリー展開が、なぜ『カーテンコールの灯』というタイトルや「不器用な父がまさかのロミオ役！？」という展開に続いていくの？

■□■すばらしい脚本？それとも中途半端？■□■

本作は多くの新聞紙評で「絶賛」されている。しかし、私の目に留まった映画サイト「くらのすけの映画日記」には、次のとおり書かれていた。すなわち、

話が整理できていないのか、語り方が悪いのか、はたまた演出が悪いのか、ロミオとジュリエットの舞台劇と現実を重ね合わせた展開ながらどっちも中途半端で、現実部分の背景が最後まで見えてこない上に、舞台劇との交錯もはっきりしないまま、無理やり感動へ持っていったような仕上がりの映画だった。

私も、後半からは本作に感動したもの、前半はほぼこのサイトの感想と同じだ。とりわけ、“身内に降りかかったある悲惨な出来事”とは、デージーの兄であった、ダンの息子が自死してしまったことだが、前半ではそれがオブラートに包まれているため、容易にそれと知ることができない。シェイクスピアの悲劇『ロミオとジュリエット』では、仮死状態になったジュリエットを見て絶望してしまったロミオが、まず毒を呷って自死。続いて仮死状態から覚めて、死体となったロミオを見たジュリエットも、絶望して自ら剣で自分を刺して自死してしまうわけだが、本作では『ロミオとジュリエット』の稽古が劇中劇として展開していく中で、ダンの息子の悲劇が少しずつ明確にされてくるわけだ。

それが、良く言えば脚本の素晴らしさになり、悪く言えば上記サイトの「現実部分の背景が最後まで見えてこない」ことになるわけだ。ちなみに、本作のパンフレットには、鴻上尚史氏（作家・演出家）の「とても悔しい傑作です」と、常川拓也氏（映画批評家）の「人と人のつながりが生む光」と題する2本のコラムがあり、それぞれ本作の脚本の出来

を絶賛しているので、上記サイトとしっかり比較しながら読んでみたい。

■□■キレた主人公を、元舞台女優が演劇の世界に！■□■

日本各地には多くの小さな民間（素人）の劇団があるそうだが、本作をみれば、それはアメリカの地方都市も同じだということがよくわかる。他方、仕事現場の前の路上で罵声を浴びせられた車の運転手に対して、ストレスを爆発させたダンが行った暴力行為は決して許されるものではないが、それを目撃していた中年女性リタ（ドリー・デ・レオン）は、さすが元女優だったというだけあって、そこからダンの演技能力を見抜いたらしい。

彼女がダンにかけた言葉は簡単で、要は自分たちの新作舞台の本読みに参加してみないかということだ。その演目は「ロミオとジュリエット」だから、1度参加すればその難易度や地域劇団のレベルは分かりそうなものだが、それまで演劇に無縁だったダンとは、なんと「ロミオとジュリエット」を知らなかったそうだから、アレレ、アレレ。他方、そこで明らかにされるのは、デージーは元演劇少女で、「ロミオとジュリエット」の幕開けのセリフをすべてそらんじている上、「ロミオとジュリエット」のセリフはリズムで覚えるものだと、それを実践してきたこと。一方で、娘のデージーからそんな教えを受けたダンとは、他方で、劇団の雰囲気を感じ始めたため、少しずつ劇団の稽古に没頭していくことになるほど、なるほど。

■□■なぜダンがロミオ役に？それが本作（の脚本）のミソ！■□■

本作の導入部から前半にかけてバラバラに描かれていたダンの現実世界と「ロミオとジュリエット」の舞台劇が、がぜん結びついてくるのは、演出家のラノラ（ハンナ・ドワーキン）の決断によって、シェイクスピアの悲劇的なストーリー展開を聞き、強く異議を唱えるダンが、ロミオ役に抜擢されるどころからだ。多くの劇団員がそれに反対したのは当然だ。

他方、ロミオの自死、ジュリエットの自死というストーリーに、ダンが「クソ喰らえだ！」と激高したのは一体なぜ？また、そんなダンを見た演出家のラノラがダンをロミオ役に抜擢したのは一体なぜ？そこらあたりから、ダンの“身内に降りかかったある悲惨な出来事”という現実と「ロミオとジュリエット」の舞台稽古が結びついてくるので、それに注目！

それにしても、この地域の劇団は、本当にダンをロミオ役に、リタをジュリエット役に起用して、「ロミオとジュリエット」を上演するの？大学時代に観た『ロミオとジュリエット』（68年）で、ジュリエット役を演じたオリビア・ハッセーのみずみずしさに大感激したことをよく覚えている私は、そんなおじさん、おばさんが演じる『ロミオとジュリエット』など、全然観たくないが・・・。

■□■“浮気疑惑”から一転して、一家総出の協力に！■□■

本作導入部のストーリー展開は、さまざまな背景事情の説明を極力省略しているためわかりにくい。しかし、建設現場で交通整理ばかりやっていたダンが、突然地元のアマチュア劇団の稽古に参加していく後半からは、ゴシップ好きの日本人には極めてわかりやすい

“浮気疑惑”になっていくので、それに注目！

最初の浮気疑惑は、ダンの後をつけた娘デイジーの目撃情報だが、その後ダンが暴力行為で会社から休職処分を受けたことを妻のシャロンが知らされると、万事休す！しかし、「雨降って地固まる」とはよく言ったもの。本作では娘のデイジーが演劇少女だったことや、デイジーとリタが演劇を通じて心を通じ合えたため、デイジーがダンのロミオ役としての出演を後押ししたばかりか、夫と同じく演劇に無縁だった妻のシャロンもそれを全面的に後押しすることになっていくので、それに注目！

もっとも、本作ではダンがロミオ役を演じるについて、そんな一家総出の協力がなぜ実現したのかについて、もっともっと深い考察が不可欠だが・・・。

■□■『Ghostlight』とは？監督・脚本と3人の家族に注目！■□■

本作の原題『Ghostlight』って一体ナニ？パンフレットの Introduction によれば、これは「演劇用語で、閉館時や公演終了後の暗くなった劇場を照らす安全灯のこと」。つまり、「劇場をめぐるさまざまな言い伝えと結びつき、『劇場に居ついた幽霊のために灯されている』とも語られるゴーストライトは、本作において重要な意味を持ち、喪失からの再生というテーマに格別の味わい深さを添えている」わけだ。そんな原題の本作の邦題を『カーテンコールの灯』としたのは見事な意識で、実にお見事！本作は、「ユニークでいとおしい珠玉のインディペンデント映画」とされているが、その脚本を書き、共同監督したのは、シカゴを拠点に活動する監督コンビのケリー・オサリヴァンとアレックス・トンプソン。2人は私生活におけるパートナー同士でもあるそうだ。

もうひとつ注目すべきは、本作で微妙な家族関係の絡みを見事に表現した主人公のダン、娘のデイジー、妻のシャロンを演じた3人の俳優は、何と本当の家族だと知って、ビックリ！なるほど、本作はそんな意味でもホンモノのインディペンデント映画なのだ。そして、そうだからこそ、それまで演劇に無関心で『ロミオとジュリエット』のストーリーさえ知らなかった中年男が、リタの導きと娘デイジーの導きによって初めて『ロミオとジュリエット』の物語を知り、ロミオ役を演じていく中で、“身内に降りかかったある悲惨な出来事”をそこにぶつけることによって見事なロミオ役を完成させるといふ本作の脚本が、燦然と輝くわけだ。味わい深いインディペンデント映画をじっくり鑑賞できたことに感謝！

2025（令和7）年7月8日記